

流布本『大同類聚方』における麻疹と痘瘡

中村 昭

一、はじめに

平安時代初期にわが国で諸国に伝承された薬方を集めて、大同三年（西暦八〇八）に撰進されたものが『大同類聚方』である。しかし、この書の古写本は現存せず、現存する写本刊本は全て江戸時代以降のものであり、またその内容体裁から見ても現存の『大同類聚方』は偽書であると富士川⁽¹⁾等によって夙に断定されている。史料的价值が疑問である為以後あまり医史学の研究対象とされなかった。しかし、これが平安時代の原作でないとしても全く無価値ということはなく、疑問は疑問として研究する価値はあるものと思考する。この程、榎佐知子氏⁽²⁾がこの書の諸本を校勘し詳細な注解を施して上梓されたことは大変な労作であって、全幅の敬意を表するものである。これによって、この書が一般にも近づきやすいものになると思われる。しかし、著者が医師でない為もあってか、病名の解釈については不十分な点も見受けられる。

筆者はわが国の疾病史にいささか関心を寄せているものであるが、この注解本のうち、特に麻疹と痘瘡にかかわりがあると思われる部分を具に読み、得る所があったと思うので、その検討結果を発表して、榎氏の再検討を願ひ、また大方の諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

この『大同類聚方』は卷之一から十三までが用薬部、卷之十四から百までが処方部となっており、本稿で筆者が取り上げるのは卷之八十五である。

この巻には次の中見出しで病名が示されている。

乃介保呂之也民のけほろしやみ

以母加差也美、以母奴久美三日いもかさもいもぬくみ

寸波美三日すばみ

宇美豆利久差うみづりくさ

そして、それぞれの中見出しの下にいくつかの小見出しがあつて、薬名、由来、適応症、処方の順に記述されている。

槇氏はそれぞれの和名の病名が現在の何の疾患に相当するかについては、断定的な書き方は避けておられるが、一応、乃介保呂之也民は発疹性疾患とし、以母加差也美、以母奴久美三日、寸波美三日は水痘とし、宇美豆利久差は天然痘とされている。これに対して、筆者は乃介保呂之也民は麻疹、それ以外のものは全て痘瘡すなわち天然痘であろうと考える。

この書を検討して見て、作者が各疾患の病態を意外に正確に記述していることに驚かされた。それはまた、この書がそれ程古いものではないということを確認することになるのだが、ともかく原文の記載の順序に従つて検討し、私見を述べたい。

原文は漢字ばかりで書かれているが漢文ではなく、送り仮名や助詞の部分を小さい漢字（いわゆる万葉仮名）で書いた宣命体が主体であり、その他、漢文の語法を取り入れて送り仮名を省略した中世の日記体のような文体の所もある。槇氏はこれらを仮名まじり文に書き下しているので、以下本文を引用する時には、先ずこの仮名まじり文を掲げ、必要に応じて原文を参照することにする。

一、麻疹の名称と性質

筆者は乃介保呂之也民は麻疹であろうと考えるのであるが、次にその判断の根拠を述べる。

富士川の『日本疾病史』⁽³⁾の麻疹の項に次の文がある。

「一説に麻疹の古名はノゲクサ又はノゲホロシなり。ノゲはノギにして芒刺の義、後世にハシカというとその意同一なりといえり。」

また、原南陽の『医事小言』⁽⁴⁾は痘瘡と麻疹について詳しいが、ハシカという言葉については次のように述べている。

「畿内及西国ニテハ稲麦ノ芒ヲモハシカト云ウ。物ノイライラスルコト、喉ノイガラキラモハシカイト云ウ。」

つまり、麻疹^{はしか}とは稲麦の芒(ハシカ)が喉や皮膚について、はしかく感じるような疾患ということである。また南陽はハシカという病名の早い使用例として鎌倉時代の『頓医抄』をあげている。

なお、ノケホロシのホロシとは発疹性疾患のことであり、平安時代の『医心方』⁽⁵⁾には隠軫^{カセホロシ}という病名が見えている。またこの『大同類聚方』にも卷之十八に加差甫呂之也美^{カサフロシヤミ}という項目がある。

ノケクサのクサというのも発疹性疾患の総称である。これは筆者が第86回日本医史学会総会⁽⁶⁾において発表したように、クサとカサはほぼ同義であるが、どちらかといえばクサの方が軽い発疹に用いられる。

しかし、ノケクサ又はノケホロシという病名は他の古典に見当らず、真に古語であるかどうかについては疑問がある。

さて麻疹という病気がいつ頃からあったかはもちろん定かでないが、古くは痘瘡と混同されやすかった。わが国の文献では奈良時代からそれらしい記載がある。すなわち、『続日本紀』⁽⁷⁾に天平九年(七三七)四月に痘瘡という名称で次の記事がある。

「太宰府管内諸国疫瘡時行。百姓多死。詔奉幣於部内諸社以祈禱焉。又賑恤貧疫之家。並給湯薬療之。」

これがどうして麻疹だとわかるかといえば、この直後に公布された官符の文章が拾芥抄⁽⁸⁾等の文献に残っており、赤斑瘡^{あかまがさ}

という名称で麻疹の病状を次のように正確に把握しているのである。

「凡是疫病名_二赤斑瘡_一。初発時既似_二瘧疾_一。未_レ出前臥床之苦、或三四日。瘡出之間、經_二三四日_一、支體腑臟大熱如_レ燒。当_二是之時_一、欲_レ飲_二冷水_一、固忌。莫_レ飲。瘡又欲_レ癢、熱氣漸息、痢更發。早不_二療治_一、遂成_二血痢_一。其共發之病且有_二四種_一。或咳嗽、或嘔逆、或吐血、或鼻血。此等中痢是尤急。宜_下知_二其意能勤救_中治_上之_レ。」

麻疹の奈良平安時代の普通の名称は赤斑瘡であつた。麻疹の病状経過は近代の内科全書を見てもこの官符の通りであり、初め二三日発熱があり、その後全身に紅斑が出て、三四日すると紅斑の為の苦痛が頂点に達し、順調なら八日目頃回復に向かうが、中には合併症を起こすものがある。従つて痘瘡とは随分違ふのだが、古代ではよく混同された。赤斑瘡という名称も痘瘡に似て赤いものの意である。

以下、『大同類聚方』卷之八十五を項目順に見て行く。

三、乃介保呂之也民

この中見出しの下に1~7の小項目がある。小項目のうちの薬名と適應症の部分掲出して、乃介保呂之也民が麻疹であるという考えのもとに検討を加える。

「1 中通河瀬薬

ノケクサ共、又、ノケホロセ共云フ。其ノ始メハ一身熱クシテ寒ヲ惡ミ、二日ノ後、小瘡多ク発リ出デ、色赤ク豊レ、膿マズシテ熱甚ダ発リ、飲食進マズ、咽乾キ口乾キ大イニ熱ヲ苦シム。八、九日ニ至リ、後ニ瘡乾キ熱去リテ愈ユ。ノケクサノ初メノ発熱ノ者ニ与フベキ方。」

これは通常の経過の麻疹について述べている。膿まないということが痘瘡との一つの鑑別点であるが、そのことも述べている。

「2 野口菜

ノケクサ悉ク出尽クシテ、初日ヨリ四、五日ノ時、惣身脹リ痛ミ、食ハズ、大便下リ、小便赤キ者ニ与フベキ方。」

これは経過が良くない場合を述べており、天平の官符にも書かれていたように、下痢は麻疹の重要な合併症であった。

3、4の小項目については省略する。

「5 薬名ナン

ノケイモ病ニテ、七、八日後モ熱ノ去ラザル者。」

ここではノケイモヤミという言葉が出ています。イモヤミ或はイモカサは痘瘡であることは後の節で述べるが、それとの違いを意識した名称である。「七、八日後モ熱ノ去ラザル者」といつているのは、麻疹の通常の経過であればこの辺で熱が下る筈なのに下らない者という意である。

6は省略する。

「7 雑太薬

ノケホロシ病ニテ熱甚ダシク、悪寒シ、譫語シテ、身大イニ痛ミ苦シミ、舌ニ黄胎アリ、口乾キ食ヘザル者。」

これも経過が順調でない場合の麻疹について述べているが、この文の中の悪寒、譫語、黄胎等は漢方の用語を取り入れたものと思われる。また、処方の内容については今回は論じないが、この書では大体複数の生薬を煎じて服用するものが多く、やはり漢方の影響が色濃い。平安時代の和方の記述としては如何かと思われる。

四、痘瘡の名称と性質

中国では古代には痘瘡は存在しなかったといわれ、魏晋南北朝の頃、外国から伝わったと推定されている。また、痘という字は宋代から現われたといわれている。⁽³⁾ それ以前には豌豆瘡とか胞瘡とか呼ばれた。『医心方』⁽⁵⁾では隋の『病源候論』

の次の文章を引用している。

「夫表裏虚実、熱毒内盛、則多発_ニ皰瘡_一。重者周_ニ匝遍身_一。其状如_ニ火瘡_一。若色赤頭白者、則毒輕。若色紫黒、則毒重。其瘡形如_ニ豌豆_一、亦名_ニ豌豆瘡_一。」

中国の痘瘡はやがて日本へも伝播したわけであるが、わが国での文献上明らかな第一次の痘瘡の流行は天平七年（七三五）であり、『続日本紀』には次のように記されている。

「是歳、年頗不_レ稔。自_レ夏至_レ冬、天下患_ニ豌豆瘡_一（俗曰_ニ裳瘡_一）。天死者多。」

このわが国での痘瘡の初発について、古林見桃は「医療歌配剂」の中で『大同類聚方』を引用して次のように記している。

「痘瘡初病、起_レ自_ニ聖武天皇御宇_一。釣者遇_ニ蕃人_一、繼_ニ此病_一。称_ニ裳瘡_一、一兒患_レ之、則一村流行也、猶_ニ裳之曳_下、故名焉。」

すなわち、裳裾を引きずるように流行するので裳瘡と名づけられたという語源説を紹介しているが、現存の『大同類聚方』にはこのような記述はなく、痘瘡の和名もモカサではなくイモカサとなっている。

しかし、モカサとイモカサは同じと考えてよく、平安時代の『和名類聚抄』では皰瘡と記されているが、鎌倉初期の『伊呂波字類抄』では皰瘡_{イモカサ}となっている。また江戸時代の『倭訓栞』では次のように述べている。

「一説に痘家古え戸を閉じて出でず、父母の喪に居るが如し。よつてもがさといふともいへり。又いもがさの略、今もいもと称せり。忌の義、痘家もはら忌事多きをもてなり。」

これらの語源解釈はいずれもやや不自然の感があり、納得し難い。そこで筆者はイボカサ→イモカサ→モカサという転化を想定している。これはアセボ↑アセイボ↓アセイモ↓アセモ⁽¹³⁾という転化と相同のものと考える。つまり、イボとイモ

は同じ語源と考える。バ行音とマ行音は相互に転化するものが通例である。イは接頭語である。

さて、あまり治療手段がなかった昔は、各種の伝染病は比較的一定の経過をとったことはよく知られている。それ故に、前段の麻疹のような推定も成り立つと考えるのであるが、痘瘡もまた順調な場合は一定の経過をとったことが知られている。定型的な痘瘡は発熱期、水泡期、膿疱期、結痂期、落痂期を辿り、しかも、それぞれが大体三日前後の期間で経過するとされた。

中国では宋代に痘瘡という文字ができ、元明代には痘科の臨床が進歩し、明代後半には痘科の専門医も出現し、右に述べた一期三日単位の見方ができ上ったようである。

ところで、この『大同類聚方』のイモカサからスバミ三日までの部分をよく読んで見ると、そういう三日単位の病期の考え方で解釈できることがわかった。以下、その検討結果を述べる。

五、以母加差也美、以母奴久美三日

こういう中見出しになっているが、イモカサヤミは痘瘡の総称であり、イモヌクミ三日はその中の第二病期のことであるから、後の小見出しにつくべきものと考ええる。

ここでは1〜4の小項目があるが、1、2が第一病期、3が第二病期、4が第三病期と考えられる。

「1 赤目葉

イモカサ病ニテ発熱シ、口燥キ手ヲ煉ル者。」

「2 薬名ナシ

イモカサ病ニテ熱甚ダシク、目ヲ上ヲ竄シ、牙ヲ咬ミテ慄フ者。

モモクサノニツメヲ水ヲ以テ解キ、イモホロケ三日ノ者ニ与フ。」

ここでイモホロケ三日という言葉を使っている。これは最初の発熱期に戦慄して、いわゆるヒキツケの状態になった場合を指している。「目ヲ上ニ竄シ」と読む方が良いと思われる。ホロケとは慄気はろけであろう。

発熱期が終ると出痘期（水疱期）であるが、これは先ず小さい点となって現われ（見点）、次第に脹れ（起脹）、紅色になるのが順調な経過である。前に中見出しにあったイモヌクミ三日というのはこの時期のこととするのが妥当である。痘いぼが温ぬくみ成長する三日間である。次の3はそれが順調でない場合を述べている。

「3 イモカサ病ニテ身ノ熱去リ、面肘臂、手掌ニ点ヲ見、心穏ヤカナラズ、痘ノ色悪シキ者。」

ここで痘という字が出て来る。この字は中国では宋代から現われたことを前に述べたが、日本では中国の明代に相当する室町時代以降に見られる。鎌倉時代の『万安方』では瘡疹という項目で瘡をモカサ、疹をハシカとしている。⁽⁴⁾ 南北朝時代の『福田方』⁽¹⁴⁾では豆瘡という字を使っている。安土桃山時代の『啓迪集』では痘瘡という字が使われているが、痘瘡の病期を三日で一期とする考え方はなく、明末期の医学が入って来た江戸時代初期以後の医書にこの看法が現われて来る。

さて、水疱期に続くのは膿疱期であり、この『大同類聚方』ではこの次に字美豆支三日という小見出しの項目がある。

「膿ツキ三日

4 佐嘉薬

イモカサ病ニテ一身腫レ脹レ、膿豊カニテ痛ム者、腫レ無ク腹膿ミ痒キ者ニ吉シ。」

これは楨氏による書き下し文であるが、筆者はこれに対して異論がある。この原文は「以母加左病一身腫脹膿豊痛者吉無腫腹膿痒者」であるので、「イモカサ病ニテ一身腫レ脹レ、膿豊カニテ痛ム者ハ吉シ、腫レ脹レ（腹は誤りと考える）無ク、膿痒キ者（に与える処方）」と解きたい。先にも述べたように、痘瘡は水疱が順調に腫脹して化膿すれば予後佳良であり、あえて薬を与える必要もないとされた。この場合はそれが順調でない者に与える処方を述べているのである。

膿疱期に続いて結痂期、落痂期となるのが通常の経過である。この次に出て来る寸波美三日というのが結痂期と考えら

れる。

六、寸波美三日

楨氏はこれを窄みであろうかと書いているが、筆者もそれに賛成である。すぼむ或はしほむという意味であろう。ただし、楨氏はこれを単独の疾患と考えて水痘と判断されたのであるが、筆者はこれを痘瘡の結痂期三日と考える。小項目の1が結痂期、2が落痂期であるが、いずれもその経過が順調でない場合について述べている。

「1 醫作薬

イモカサ病ヲ抓ミ破リ、黒色ニ乾燥シ、煩悶咬牙シ、醫ノ悪臭修メ難キ者。」

この最後の部分の原文は「悪臭難修醫者」なので、筆者はこれを「悪臭シ、修醫シ難キ者」と読みたい。何故ならば、痘瘡は膿疱が漸次収縮して（しぼんで）醫を形成するのが順調であり、それ故にこの結痂期は收醫期とも呼ばれている。この言葉は漢方に由来するが、蘭方にも用いられ、緒方洪庵訳『扶氏経験遺訓』¹⁶でも使われている。なお痘瘡の病期は「扶氏」においても三日単位で述べられている。

2の落痂期については省略する。これで痘瘡の病期が一通り終る。

七、宇美豆利久差

これは膿ヅリクサであり、前のイモカサヤミとは違う名称だが、これも痘瘡のことと考えられる。前の項とは別の伝本によっており、病期についての考え方も違っている。

先ず小項目の1は痘瘡の全経過を述べているのでやや長い文である。

「1 山田葉

ノケクサニ似テ、別ニウミヅリクサト云フ者アリ。其ノウミヅリクサヲ治ムルニ用フ。ウミヅリクサハ惣身熱発リ、身フルヒテ寒ヲ惡ミ、一身ニ赤キ小瘡現ハレ出デ、四、五日ノ後ニ至リ皆膿ミ腫レ、高ク肌腫レ太リ満チ、面上、頭頂ニ重ク、六、七日ニシテ瘡上ノ膿乾キ、痂ヲ生ズ。其ノ後ハ五、六日ニ乾キ愈ユ。ウミヅリカサノ初メテ発ルニ与フベキ方。」
ここでは病期の三日単位の考え方をしていないが、言っている内容は同じである。痘瘡の順調な経過について述べ、ノケクサ（麻疹）に似ているけれど違うということも言っている。

「2 タナクラ葉

ウミツキ瘡ノ初メテ発リタルトキ、惡寒シ慄フ者ニ与フベキ方。」

これは前に出て来たイモホロケ三日に相当するものである。

「3 車見葉

ウミヅリクサ悉ク膿出デ、腫レテ熱ク、卒ニ一身ノ瘡上痒クシテ忍ビズ。之ヲ抓メバ血流レ出シ、皆瘡上乾キ愈エテ、息短ク口乾キ湯水ヲ好ミ、身慄ヒ小便赤ク、大便遠ク危フキ者ノ方也。」

これは膿疱期の後の結痂期の経過が悪い場合を述べており、前の項のスバミ三日の所とほぼ同じ症状である。

「4 葉名ナシ

ウミヅリクサノ初発ノ後、瘡出デ、赤色ナルベキニ、卒ニ灰色ニ変ハリテ、息重ク熱甚ダシキ者ニ大イニ驗アル方。」

これは病期の順序からいえば逆であり、出痘期（水疱期）の経過が良くない場合を述べている。前に出ていたイモヌクミ三日の経過が悪いのと同じである。これが順調に膿疱にならないと致命率が高かったのである。

5、6はこれと同じ症状に対して別の処方あげている。

八、結び

以上述べたことから明らかなように、この『大同類聚方』の巻之八十五は麻疹と痘瘡の巻である。中国の医書でもこれらは痘疹として一緒に論じられることが多かった。痘は痘瘡、疹は麻疹である。わが国の医書でも、鎌倉時代から安土桃山時代までは大体において宋元医学を踏襲して、痘瘡と麻疹を一つの項目で取り上げ、その異同を問題にしているが、痘瘡の病期による看法、治方を説くまでには至らなかつたようである。それがなされたのは明末の龔廷賢や朱巽の医説が入つて来た江戸時代初期以後である。⁽³⁾

従つて、『大同類聚方』が平安初期に、麻疹と痘瘡に対してこれだけ精確な記述をしていたと考えることは困難であり、この部分だけから見ても、富士川等⁽¹⁾の指摘の通り江戸時代の述作と考えるのが妥当である。おそらく和方家の立場の人で漢方にもかなり通曉したものが作つたと思われるが、伝写の過程において一部錯簡を生じた模様である。

現存『大同類聚方』の全ての記述にわたつてその書かれた時代を推定するのは容易なことではないが、なお古い伝承が一部含まれている可能性も否定できず、今後の課題と考える。

参考文献

- (1) 富士川游『日本医学史』初版、明治三七、形成社、昭和四七
- (2) 槇佐知子『全訳精解大同類聚方』平凡社、昭和六〇
- (3) 富士川游『日本疾病史』初版、明治四五、平凡社、昭和四四
- (4) 原南陽『叢桂亭医事小言』文化二(一八〇五)版
- (5) 丹波康頼撰『医心方』永観二(九八四)撰進、安政六(一八五九)版、新文豊出版公司、民国六五(一九七六)復刻
- (6) 第86回日本医学学会総会、一般講演、中村 昭「多聞院日記における皮膚疾患・化膿性疾患の検討」昭和六〇
- (7) 『続日本紀』延暦一六(七七七)撰進、吉川弘文館、昭和四六
- (8) 原南陽「医事小言」より引用
- (9) 北本 治編『臨床内科全書』第10巻、感染性疾患』金原出版、昭和四五

- (10) 源順『和名類聚抄』延長(九二三—九三〇)頃撰進、元和三(一六一七)版
- (11) 『伊呂波字類抄』鎌倉初期成立、日本古典全集刊行会、昭和三
- (12) 谷川士清「倭訓栞」江戸末期刊、「古事類苑、方技部」吉川弘文館、昭和五二、より引用
- (13) 熱沸瘡という字に対して『和名類聚抄』はアセモ、『伊呂波字類抄』はアセボと訓をつけている。又、アセイボ、アセイモは方言に残っている。
- (14) 「有林福田方」著作年代不詳、南北朝期といわれる。日本古典全集刊行会、昭和十一
- (15) 服部敏良「室町安土桃山時代医学史の研究」吉川弘文館、昭和四六
- (16) 緒方洪庵訳『扶氏経験遺訓』江戸末期、写本

(神奈川県総合リハビリテーションセンター事業団七沢リハビリテーション病院)

A Study on Measles and Variola in the Present Texts of

“Daidoruishuho”

by

Akira NAKAMURA

The book of old Japanese prescriptions called “Daidoruishuho” was compiled in the 3rd year of Daido (808 A.D.) in the Heian period. However, the original book was soon lost and the present texts which are available to us are said to be of dubious reliability.

The author studied the 85th chapter of this book and verified that the chapter was devoted to measles of variola, which proved to be described, to our astonishment, from a rather modern nosogra-

phic standpoint.

So, the authour presumes that the chapter was written in the early Edo period (17 th C.) and influenced by Chinese medical knowledge.